

---

# 思い出と夢の中

赤石 ナイ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

思い出と夢の中

### 【Nコード】

N1763L

### 【作者名】

赤石 ナイ

### 【あらすじ】

あなたに大切な人はいますか？

もしその人が、いきなり目の前から消えたら、奪われたら。

これは、二人の男のその後を書き記した、魔法と異世界が舞台のお話。

## 何気ないハジマリ（前書き）

一話、一話はそれほど長いものではありませんので、簡単に読みきれます。

## 何気ないハジマリ

ここは夢の中だ。

夢の中だというのに俺はこれを夢だと自覚していた。理由は簡単だ。

俺の目の前には決して戻ることのない光景が広がっていたからだ。目の前には生まれ育った街並みに、休日の家族連れ、商売にいそしむ八百屋、親とはぐれて今にも泣きそうな子供。一見何処にでもあるようなありふれた風景の中に彼女とあいつはいた。

彼女は泣きそうな子供を見つけると、その子の下へと駆け寄り、笑顔で話しかけ始めた。すると、彼女の隣にいた男がやれやれといった感じでその子の親と一緒に探し始めた。その子の親は案外すぐ側にいたらしく、親は彼女たちに頭を下げ、立ち去っていった。そんな光景を見ていた俺に男は気づいたらしく、見ていたなら手伝えよ、と肩を小突かれてしまった。俺は面倒くさいと返すと、次は彼女が、困った子供を見るように苦笑して、おはよう、と挨拶をしてきた。俺も朝の挨拶で返す。

そして、俺たちは一緒に街中へと向かう。

そんな当たり前の日々、何処にでも在るような日々、そして、最高の日々。

しかし、もう戻ることのない日々、思い出と夢の中だけの日々。

カチツ、カチツ、カチツ、カチツ……………、

部屋の中には時計の音だけが鳴り響いていた。窓の外はまだ暗く、人々は夢の中にいた。しかし、この部屋にいる男はゆっくりとソファーから体を起こした。

「……………」

随分と懐かしいものを夢に見るもんだな。ここ何年もあの頃のこととは夢に見ていなかったのにな。

「……、らしくねえ」

男はまだ冴えない頭でそんなことを考えるとポツリと呟いた。男は少なくとも過去を蔑ろにするような男ではなかったが、思い出に浸るような男でもなかった。過去より未来、未来より今というように、からつきしの現実主義者であった。そして、それを本人が一番に理解していた。

男は頭を軽くかきながら、斜め前に在る時計に目をやると、短針は四を指していた。それを見て、ため息にも似たような息を吐くと、再びソファーに横になった。

「たまには良いか」

そう呟き、軽く鼻で笑うと、夢の中くらいは、と思いながら再び目を閉じた。

みなさんは並行世界というものをご存知だろうか。ある世界から分岐し、それに並行して存在する別の世界を指す言葉のだが、かといってここがその並行世界というわけではない。むしろ、異世界といった方が正しいのであろう。細かく説明すると長くなるので簡単にはなるが、例えば、ノート一枚の紙の上で分岐しているものが並行世界、次のページが異世界といった感じである。

なぜこのような話になったのかというと、この物語がそういったものを舞台に進むからなのである。

さらに、異世界には絵本やテレビの中だけにあるような魔法というものがある。

そして、これはそんな魔法の世界を舞台とするお話である。

「ふああ〜」

黒髪が短いボーイッシュな少女はよく寝れなかったのか、仕事の制服を身にまといながらも、大きなアクビをしていた。そんな彼女を隣で歩きながら見ていた金色の長髪の少女に注意をされていた。

「仕事場でアクビをしない。全く、昨日は何時に寝たの？」

そんな彼女は同じ制服をまといながらも、隣にいる少女とは違どこかキツチリとした空気をもし出していた。

「いや、最近新しいゲームにはまっちゃって、敵さんがつよくてさ。」

などと、隣にいる長髪の少女に言い訳にもならない言い訳をする当たり前のように、また注意をされた。そんなことを繰り返している彼女らの後姿を見ながら、

「朝っぱらから、何やってるんだか」

と、少しあきれたように男は苦笑いをした。そんな男に彼女たちは気づいたのか、男のほうへ歩いていき、笑顔で朝の挨拶をした。

「おはようございます、<sup>ハジメ</sup>元さん」

「おはよう、フェイ。朝から元気だな」

フェイ・アルスター。時空保安局の魔導師であり、局内でもトップクラスの能力を持つ。俺の人生を変えるキツカケとなった女だ。ついでに21歳。

「おはようございます。元さん。今日も仕事がんばです」

「おはよう、リーゼリット。程ほどにな」

リーゼリット・アルバーク。時空保安局の魔導師であり、優れた魔力を持つ。俺の人生を変えるキツカケとなった女だ。猪突猛進が似合う21歳。

「私だって朝から騒ぎたくありませんよ。でも、リズがちゃんとしななんです。」

「そんな人を駄目人間みたく言わないでよ。」

「ちがうの？」

「ちがうよ！意外とちゃんとしてるよ私！」

……、全く、こいつらは朝から騒がしい。

というよりもリーゼリットが8割方一人で騒いでいる。通路の真ん中で騒いでいるため、そこを通る多くの局員たちが変なものを見る目で見ながら通り過ぎていく。そんな局員たちの視線を元と呼ばれている男はひしひしと背中に感じていた。

こいつらはこれだけの視線を浴びながら何にも感じないのか!? まったく、どんな神経をしているんだか。

「それくらいにしておいたらどうだ? リーゼリット、フェイ。さつさとブリーフィングに行くぞ」

このまま放つて置いたら、永遠と続けていくという感覚にとらわれたのか、男は二人の少女に誰にでも分かるくらいの不快感を乗せて言葉を放った。

「そ、そうですね。そろそろ行きましようか。ね? リズ」

「そうだね。さあ、行こう!」

男が言葉に乗せた不快感をフェイは感じ取り、あわてた感じでもう一人の少女に同意を求めたが、さすがはリーゼリット・アルバーク。そんなことすらも全く意に返さないかのように能天気にも当たり前のように答えた。これを見た男は諦めたのか可笑しく感じたのか、それとも両方感じたのか、右手で頭を軽くおさえ苦笑いをした。

男と二人の少女は本日の仕事の始まりとなるブリーフィング室へと向かっていた。二人の女は先ほどのことがなかったかのように楽しそうに話に花を咲かせていた。とういうよりも、リーゼリットが一人で話を振り、フェイがそれに相槌を打つというものだった。そして、そんな様子を二人の横で歩きながら見ていた男は、女というのはどうしてこんなにも話すのが好きなのだろうか、と疑問に思っていた。しかし、考えても答えが出るわけでもないので、考えるのをやめた。

そして、そうこうしているうちに、いつの間にか部屋の前についていた。

「あ、もう着いたんだ。話をしていると時間って早く過ぎるよね」  
フェイに同意を求めると、そうね、と短い返事を彼女に返した。  
しかし、それに不満だったのか、なにやら騒ぎ始め、男にそれくらいにしておけと注意をされていた。

三人は部屋の前に立つ。すると、機械的な音とともに扉が開いた。  
少女たちはいつもと同じように、さっさと終わらして早く帰ろう、  
などと言いながら部屋の中へ入っていった。中には彼女たちと同じ  
くらいの年齢に見える女性二人が会話に花を咲かせ、彼女たちより  
の明らかに幼い少年少女三人が元と同じくらいの年齢に見える男に  
楽しそうに話しかけていた。それを見た、元は確かに軽く口元を緩  
め、部屋の中へと入っていった。

元はいつもと昨日と、そして一昨日と同じような一日が始まると  
思っていた。彼だけでなく、ここにいる八人全員がそう思っていた。  
毎日と変わらない、デスクワーク、パトロール任務、上層部へのゴ  
マすり。

本来、彼らが所属している第四独立機動部隊というものはそうい  
ったものが任務の主となるものではないのだが、世界はそれだけ平  
和ということになる。

しかし、今日という日がこの男が所属している第四独立機動部隊  
にとつて、あれほど大きな転機になるとは誰も思っていなかった。



## 何気ないハジマリ（後書き）

これは、まだ導入部分なのでこれがこの小説のリズムといたったわけ  
ではありません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1763/>

---

思い出と夢の中

2010年11月22日21時46分発行